中国人の目で見た『中日大辞典』

顧 明 耀
〈西安交通大学教授、県立広島女子大学名誉教授、愛知大学中日大辞典編纂所研究員〉

1．辞書評価のポイント

日常生活で買い物の時でも何について評価する時でも、はっきりしているかどうか別としても、実は心の中に、あるいは頭の中に標尺があると思います。標尺という言葉を使ってしまいましたが、この言葉は、『大辞林』の解釈によれば、「水準測量の際、垂直に立てて視準軸の高さを測るのに用いる目盛り精度の高い尺。」（第二版 p. 2201）、『広辞苑』によれば「水準測量の時、視準線の高さを測る器具。」（第七版 p. 2495）になります。分かりやすく言えば、物測りをする時に基準とするものではないかと思います。これがないと、いきなり評価してくれと言われたら、どこから見てよいか迷ってしまうかもしれません。辞書を見る時でも同じく標尺が必要でしょう。そうは言っても、誰でも同じ標尺を使っているとは限りません。やはり人によって、もっと正確に言えば辞書利用の目的によって違ってきます。ここで申し上げるのは中国語を習う日本人、中国語を日本語に訳したい日本人、そして日本語を習う中国人、中国語を日本語に訳したい

中国人に絞らせていただき、特に今回の演題に従って後者をポイントにしてお話しさせていただきたいと思います。一般的に言えば、日本語を習う中国人、中国語を日本語に訳したい中国人は、中日辞典のことと言ったら、主に次の三つの角度から見ているでしょう。

1.1　見出し語の採録

(1)　採録された見出し語の性質

基礎的な語かどうか、特定分野に使う語かどうか、毎日のようによく使う語かどうか、特定の人たちが使う語かそれとも誰でも使う語か、などなど。

(2)　採録された見出し語の数量

辞書は収録された語数によって、通常、大型、中型、小型に分けられています。それぞれ20〜30万語、７〜８万語、３〜４万語収録されているのですが、もっと大型のものも、もっと小型のものもあります。数量は決して任意のもの、採録された単語の量ではありません。所定の性質をきちんと持っているものでなければなりません。

(3)　見出し語を採録する方法

辞典に採録された見出し語が編纂方針と一致しているか、使用者自身の狙いに即しているかにかかわるものです。通常、ある辞典をベースにして見出し語を増やしたり消したりする編纂方法か、日常の言語生活から実際使っている言葉を土台にして参考資料と照らしながら増やしたり消したりする編纂方法などがあります。これらの方法を合理的にまた総合的に運用するものもあります。

以上のことは当該辞書に調べたい語が載っているかどうかにかかわってくるため、辞書を見るときに評論者にも使用者にも重視されています。

1.2　見出し語の配列

ある辞書に採録された語をどのように並べるか、いわゆる見出し語の配列は、引きやすいかどうか、載せてある語でも簡単に探せるかどうかにかかわるもので、辞書にとっては非常に大切なことです。中国語辞典で言います

と、並べ方は、基本的に読み方によるもの、文字表記によるものの 2 種類に大別できます。これは中国語の文字は表音のものではなく表意のものだからです。この 2 種類の配列はいずれもメリットもあればデメリットもありますから、多くの辞書は二者を上手に用いて合理的に組み合わせています。

(1)　まず読み方による配列を見てみましょう。読み方による配列は確かに便利で使いやすいのでしょうか。実例を見てみましょう。

次はある辞典の一ページちょっとにわたる見出しです。

小组、下去、下台、夏天、下午、下乡、狭小、下旬、下游、狭窄、细胞、西北、西边、西部、西餐、喜出望外、洗涤、吸毒、些

（『はじめての中国語学習辞典』朝日出版社 p. 572–573）

これを見たら、順序どころか、むちゃくちゃではないかと思うかもしれません。しかし、これは厳格にアルファベットによって並べた結果です。アルファベットで書き直せば、次のようになります。

xiaozu/xiaqu/xiatai/xiatian/xiawu/xiaxiang/xiaxiao/xiaxun/xiayou/xiazhai/xibao/xibei/xibian/xibu/xican/xichuwangwai/xidi/xidu/xie

皆さん、見出しがこのように配列された辞書はどんな人にとって使いやすいでしょうか。漢字に馴染みがうすい欧米人なら使いやすいかもしれません。普段漢字ばかり使っている私たち中国人はアルファベットが読めないことはありませんが、それを見てどの漢字に当てはまるかという反応は決してすばやくはないでしょう。日本の方も似ているでしょう。ということで、日本で出版された中日辞典には、今の例のようなものは相当少なくて、中国で出版されたものなら、もっと少ないわけです。

(2)　次に文字表記による配列を見てみましょう。中国語の表記には漢字しか使いませんから文字表記の配列といったら漢字の配列になります。漢字の配列は、もっとも伝統的な方法は部首によって分けて並べることで、皆さんが使っている漢和辞典はこのような並べ方の辞書です。

漢字の大半はどの部首に分類されているか、割合簡単に判断できますが、これはすべての漢字にとっていえるものではありません。かなりややこしくて、なかなか判断しかねる漢字も相当あります。

例えば、「清」「江」は「氵」、「燃」「焼・烧」は「火」、「蕙」「藿」は「艸・艹」、「訌・讧」「謚・谥」は「言・訁・讠」の部に入っているのは分かりやすいのですが、「民」「考」はどの部に入っているか、という質問に対しては、そんなに容易く答えられないかもしれません。なぜでしょうか。まず、その一つの原因は、辞書によって部首の種類も数も相当異なっているからです。部首の種類も数も辞書によって違うということは、もしかしたら、ご存知でないかもしれません。ここで何冊かの辞書の部首を比べてみましょう（表１）。

表１　部首の比較

画数	甲	乙	丙	イ	ロ	ハ
1画	5	5	5	8	6	6
2画	23	21	24	32	23	23
3画	31	34	18	40	40	31
4画	33	39	39	49	39	34
5画	23	22	23	36	28	23
6画	29	27	26	33	28	29
7画	20	19	17	26	24	20
8画	9	11	9	13	11	9
9画	11	9	8	12	11	11
10画	8	4	4	10	9	8
11画	6	3	3	9	9	6
12画	4	3	3	5	5	4
13画	4	2	2	5	4	4
14画	2	1	1	2	2	2
15画	1	0	0	1	1	1
16画	2	0	0	2	2	2
17画	1	1	1	2	1	1
合計	212	201	183	285	243	214

注：甲・乙・丙は中国で出版された権威的だと認められている中国語辞典。イ・ロ・ハは日本で出版された中日辞典。

同じ一漢字が、どの部首に入っているかは、必ずしもどの辞書も同じとは限らないのです。ですから部首による配列の辞書にはたいてい音訓索引が、一部の辞書にはその上総画索引が付けてあります。これは、読み方を利用して、どの部首に入っているか分からなくても調べられる手がかりで、もう一種のインデックスになります。中国語の場合は音読み訓読みの分け方もありませんから、索引を通して調べるならピンインを利用するほかありません。

読み方によって配列する場合にしても、読み方を通して文字表記で配列する場合にしても、調べたい漢字については、正しい読み方、そして正しい表記が分からなければ使えないでしょう。これは辞書使用者に関して言ってい

るのですが、辞典編纂者が辞書使用者の立場に立って辞書を見る場合も同じなのです。一方、事実上、漢字の読み方が一般的な読み方でないものもありますし、いわゆる多音字（いくつかの読みを持つもの）もありますし、この場合どう読むか容易く分からないものもあります。それに、同じ発音にしても違う漢字（同音字）で表記することもありますし、片方が正しい表記で、片方が俗字あるいは過去に通用した表記になる場合もあります。辞書がこれらのけっこう複雑なことについて、規範的なもの、かつ実用的なものを明記しているかということは、私たち辞書使用者が辞書を選ぶときに考えていることでしょう。

それから中国語辞典の場合、漢字表記のことを言えば、一漢字のものと、複数の漢字からできたものと、二つに大別できるでしょう。漢字表記を無視して一律に発音で並べるなら、先ほどの例のようになります。漢字表記を重視して一字目の漢字を親字にして、一字目が同じ言葉を親字の下に並べる方法もあります。今の中日辞典はほとんどがこの形を取っています。そうすると次のことが出てきます。

(3)　漢字を親字にして、その下にこの漢字を造語要素にした熟語が出てきます。これらの漢字熟語は読みによって配列、あるいは漢字の画数によって配列するしかないでしょう。大多数の辞書は読みによって並べてあります。そこで、出てきた問題は、熟語をどれくらい採録するか、どのような熟語を採録するか、採録された熟語の規範的な表記をどのように決めるか、この熟語を独立した小見出しにすべきかそれとも親字の用例として親字の解説に入れたほうがよいかなどがあります。このことを考察するため、私はランダムサンプリングで、何冊かの辞書について四つの親字の下の小見出しを統計してみました（表 2 ）。

それぞれの辞典に採録された小見出しがどんなに違うか、このデータからも想像できるでしょう。

今回の調査を中心にして、これまでに見つかったことも含めて、独立した小見出しについてもう少し検討が必要なものを、とりあえず以下に挙げてみます。

表２　小見出しの数

親字	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	A	B	甲	乙	丙
愛	119	55	41	27	83	21	35	37	38	9
敬	64	32	32	20	45	15	17	27	33	20
新	328	94	104	58	166	64	77	79	103	60
永	50	18	16	11	31	12	21	16	15	13

注：イ・ロ・ハ・ニ・ホは日本で出版された中日辞典（ホが『中日大辞典』）。A・Bは中国で出版された中日辞典。甲・乙・丙は中国で出版された権威的だと認められている中国語辞典。

１）熟語にならないもの。いわゆる任意に組み合わせた連語。例えば、“新厂”“新车”“新出品”“新出版”“新方案”“新方法”“新花样”“新计划”“新纪录”“新家庭”“新开店”“新社会”“新世界”“新事物”“新学期”“永不分离”“永不生锈”“永不忘本”“永不叙用”などを見出しとする辞書がありました。また、“爱上”“遭到”などごく一部の「動詞＋趨向補語」、“透漏”のような完全に並列した連語を一つの動詞として扱う辞書もありました。これらの語についての解釈は間違いではありませんが、独立した見出しにする必要があるかどうかについてはもう少し検討していただきたいと思います。と言うのは、このような言葉をすべて見出しにしたらもうきりがない、と同時に紙幅が大幅に増えていきます。

たまに、熟語どころか中国語の語として認めにくいものさえ採録されていることがあります。例えば、ある辞典で“坐劲”という言葉が見つかりましたが、この言葉は、中国で出版されたすべての中国語の辞典に載せられていないし、ネットで調べても実際に使われた例はありませんでした。

２）辞典の編纂方針に合致するかどうか。古語辞典、専門用語辞典などを除いて、一般的に辞典と言えばほとんど現代中国語の辞典でしょう。現代中国語の辞書なのに、現代中国語で基本的に使わないもの、“敬禀”“敬伏”“永佃权”“永乐爷”などの小見出しがありました。“永乐爷”は明朝の皇帝を指して非常に尊敬する言い方で、私たちだけではなくて私の祖父でさえ使わない言葉です。私の祖父は長く清朝の生活をしていたものですからかなり古い

言葉を使っていました。でも“乾隆爷”という言い方はしますが、“永乐爷”という言い方は絶対しません。

3）同じ常用程度の語でも採録がアンバランス。よく使うものが漏れて、さほど使わないものを採録することを指します。例えば、“绪”を親字とするところで、その下の小見出しに“绪论”“绪余”が出てきました。“绪余”はそれほどよく使われるものではありませんが、それよりずっと常用されている“绪言”が採録されていません。かつて、私は日中辞典についての調査研究をしたことがあります。日曜日から土曜日まで七曜の言葉を調べてみたら、同じ辞書ですが、扱い方がばらばらになっていることがよくありました。日曜日、木曜日はそのまま見出しにして、土曜、金曜は「日」を付けないで見出しに、月曜日、月曜の見出しはなくて「月」のところに説明を入れてあり、火曜、水曜は見出しもないし一言も触れてないというような辞書がありました。中日辞典も似たようなことが少なくありません。なぜこうなったのかといえば、辞書は例外なく多くの人が執筆に携わっていますが、このようなことについては話し合いをしていないし、各自の扱い方もほかの人に言ってないし、最終的に誰か一人が全部に目を通していないからでしょう。

4）「児」化が適切でないもの。“爱不够儿”“爱理儿不理儿”“新旧儿”“爱小儿”“新新儿的”などの小見出しがありました。まず、“爱不够”は熟語にならないと思います。“不够”は動詞の後に付けて「いくらしても満足にはならない」「いくらしても飽きてしまうことはない」という意味になります。“吃不够”“看不够”“挣不够”の例を挙げたらきりがありません。ここの“够”は動詞で、“動詞＋不够”も名詞にはなりませんから普通は「児」化しません。“爱理不理”は熟語にしてもしなくてもいいようです。“爱理不理”は「“爱”＋動詞＋“不”＋同じ動詞」というパターンからできたものですが、このパターンの表す「しようとしまいとかまわない」の意とはやや変わってきます。このパターンによってできた“爱来不来”“爱去不去”“爱听不听”“爱喝不喝”などを小見出しとして挙げる必要はまったくありませんが、“爱理不理”だけは小見出しとして挙げてもおかしくないのです。そうは言ってもここの“理”はやはり動詞のままで、「児」化しません。もう

一例を挙げてみましょう。“新”と“旧”は反対語で、“古今”“中外”“冷热”“远近”“薄厚”“大小”“成败”“输赢”“升降”など反対意義の名詞・形容詞・動詞からできた熟語名詞です。この類の熟語も基本的には「児」化しません。

5）用字が規範的でないもの。例えば“爱克司”“爱滋病”は、中国の権威的な辞典のどれにも、“爱克斯”“艾滋病”と書いてあります。ネットで調べたところ、実際ほとんどが“爱克斯”“艾滋病”という表記を使っています。不適切なものしか書いてないものもあれば、どれが規範的でどれが正確ではないが通じる表記かというようなことをはっきりしないで両方を同時に書いてあるものもあります。

6）稀ではありますが、間違っているもの。“新钍”の“钍”は tu と読むべきですが、du と間違えられて、掲載順序もそれによって変わってしまっているものもあります。

1.3　親字をはじめ、すべての見出し語の語義解明

親字についての字義解明は、小見出しである熟語の語義解明とは、まったく同じではありませんが、ここではまとめてお話ししたいと思います。

(1)　位相についての説明

口語か文章語か、標準語か方言か、謙譲語か尊敬語かについての説明。コミュニケーションをはかる時の単語の使用にとっては実用的な情報になります。

(2)　品詞についての説明

具体的意義を持っているものか、文法的な機能しかないものか、もう少し細かく分けると、名詞か動詞か、副詞か形容詞か、などの文法的情報です。調べる語を正しく使いたい辞書使用者にとっては、欠けてはいけない重要な内容ですが、間違った内容であればさらに害が大きいです。例えばある辞典では、副詞の“草草”（辞典名省略 p. 105）を形容詞に、動詞の“初试”“初学”（辞典名省略 p. 154）を形容詞に、動詞の“除外”（辞典名省略 p. 155）を前置詞に、前置詞の“第”（辞典名省略 p. 178）を動詞にしていました。

もっと多く出てきたのは詞と造語要素の混同です。例えば、親字“碑”のところに名詞とはっきり書いてあるのに、例に挙げたのは“墓碑”“纪念碑”（辞典名省略 p. 178）、親字“初”のところに形容詞とはっきり書いてあるのに、例に挙げたのは“年初”（辞典名省略 p. 154）などです。

(3)　語釈の正確さ、そして分かりやすさ

前に述べた二項目もそうですが、語釈についてはさらに次のことが言えるでしょう。よい語釈を書くには、正に林大（はやしおおき）先生のおっしゃったように、少なくとも以下四つの要素が必要でしょう。1）ひとつひとつの言葉への執筆者の理解能力・運用能力、2）語釈の根拠になる実例の調査・確認、3）関連する先行研究の勉強・参考、4）先行諸辞書の当該語釈への吟味・検討。この四つの要素のほか、もっとも根本的なのは辞書編纂という仕事への態度だと思います。まず、上述要素の欠如あるいは不十分ならば語釈の正確さを保証できないでしょう。ある辞典では“香火”という言葉への語釈は「紙巻タバコ」と書いて、同義語は「香烟」と明記してあります（辞典名省略 p. 1204）。これはたぶん中国の『现代汉语词典』（第 6 版 p. 1421、第 7 版 p. 1430）をもとに訳したと思われます。『现代汉语词典』の該当するところに書かれているのは、【香烟】[1] ②“旧时指子孙祭祀祖先的事情。”（昔、子孫が先祖を祀ることを指す）ですが、【香烟】[2] はタバコのことです。おそらくこの見出しの執筆者は小さい文字の 1・2 に気をはらわないで【香烟】[2] の語釈を丸写しして日本語訳したのでしょう。語釈の正確さは第一義的なものですが、これさえあればもう良いということではなくて、さらに分かりやすさを追求しなければなりません。

(4)　その見出しと関連する背景、社会文化、そして同義語・類義語、反義語・対義語との関係など最低程度の必要な情報もあったほうが良いと思います。この内容が欠如していると、言葉の誤解・誤用をもたらしてしまう恐れがあります。ある辞典では“两条肥皂”という用例の訳に「二つの（細長い形状の）石鹸」（辞典名省略 p. 220）と書いてあります。これは事実とちょっと違います。洗顔石鹸ならどんなに細長いものでも“一块”“两块”と言います。昔の洗濯石鹸は二つで一セットになっていて形も繋がっていま

すから、“两条肥皂”は四つの洗濯石鹸のことを言っています。関連語を挙げていますが、その意味・ニュアンス・使い方の差異に触れていないものがかなりあります。読むときにちょっと残念だなと感じます。

(5)　用例は辞書にとって非常に重要なものです。辞書を使うとき用例を丁寧に吟味し、暗記できるまで読むことは、外国語勉強の得策だと思います。ということもあって、正確で、自然で、実用的な例文しか使用しないことが望ましいです。しかし、調べてみたところ、もっと検討して改善していただきたいところがまだまだあります。例えば、ある辞典では動詞“标”の語釈に“标上价格”“标上标点符号”（辞典名省略 p. 97）と二つの例を挙げています。例自体は間違いではありませんが、“标”の使い方については使用者に「“标”＋上＋名詞」だけだという印象を与える恐れがあります。数詞“三”の用例には“我再三劝他，可他就是不听”（辞典名省略 p. 465）という文が出てきました。数詞“三”はせいぜい副詞“再三”の造語要素で、この文は決して“三”で作ったものではありません。動詞“宣示”の用例には“宣示内外”“宣示众人”（辞典名省略 p. 1255）と二つの例を挙げていて、“宣示”の後に対象を表わす名詞しか来ないとのイメージを学習者に与える可能性が高いでしょう。もしその一つの例を“宣示主张”にしたら“宣示”の後に内容を表わす目的語も来られるという情報を辞書使用者に提供できるでしょう。

以上、全部ではありませんが、このような問題の有無は、私たち辞書使用者が期待している辞書であるかどうかを判断する際の基準になるかもしれません。15年前から約 6 年間、愛知大学『中日大辞典』の編纂の仕事に携わらせていただきました。微力ですが上述の目標に向かって頑張ってきました。それでもこのような問題がまったくないとの保証はできません。機会があれば『中日大辞典』の改善にもう少し尽力したいと思います。

2．『中日大辞典』見出し語の採録、配列

『中日大辞典』は、第一版の「編者のことば」によれば、「井上辞典を出発点とし、これに必要な語彙を補充して現実の要請に応じ得る」ことを目標にして作ったのです。そのために、日常使う中国語から単語のカード約14万枚を作って、「語数としては 7 ～ 8 万語」を集めました。増訂版については「増訂に際して」で“汉语词汇的统计与分析”などの資料をもとに行なったのです。第三版の改定は、今までのような実例によるカード、中国の公の語彙資料のほかに、近年来非常に進歩してきた中国の辞書をも利用しました。見出し語採録の方法は割合に信用できると思います。一つの例だけ挙げたいと思いますが、『中日大辞典』と先ほど挙げました四冊の辞書を比べてみたところ、“爱理不理”と「“爱”＋動詞＋“不”＋同じ動詞」というパターンの両方を小見出しとして出してあるのは『中日大辞典』だけです。

それから見出し語の配列について一言お話ししますが、初版、第二版に比べて今の第三版はもっと科学的になり、より引きやすくなりました。初版、第二版は、複数の読み方を持っている、いわゆる多音字は、全部一箇所に集中して意味解釈をしていましたが、第三版はそれぞれの読みによって配列するようにしました。例えば、“差不多”という言葉を調べたいならば、『中日大辞典』では、初版、増訂版、増訂第二版は、まず親字“差”を調べると、字解では、この字の読み方は、A差 chā　B差 chà　C差 chāi　D差 cī　E差 cuō と五つあります。初版（p. 157–158）、増訂版（p. 290–291）、増訂第二版（p. 290–291）では、その後にA差 chā　B差 chà　C差 chāi　D差 cī の小見出しを並べてあって、E差 cuō の読みは現代中国語では使わなくなったから字解のところにだけ一筆書いて、小見出しは挙げていません。一方、第三版では、p. 182–183の“差 chā”の字解の最後に→ chà chāi chài cī とあって、それから小見出しを並べてあります。そしてp. 189–190に“差 chà”の字解（最後に→ chā chāi chài cī）、小見出し、p. 191に“差 chāi”の字解（最後に→ chā chāi chài cī）、小見出し、p. 192に“差 chài”の字解（最後に→ chā chà chāi cī）（現代中国語では使わなくなったから字解だけ残してあって、

小見出しは挙げてない)、小見出し、p. 284に“差 cī”の字解（最後に→ chā chà chāi chài)、小見出しという形に変わってきました。

3．『中日大辞典』の語義説明

『中日大辞典』第三版の刊行にともない、2011年にこの辞典のことを紹介したときに、私は次の例を使いました。ここで同じ例を使わせていただきたいと思います。

例 1 ：親字“面”について（p. 1184）

中国版の辞書はふつう“面”“面（麵)”と二つの親字を載せています(《现代汉语词典》第 6 版 p. 898、第 7 版 p. 903、《现代汉语规范词典》2004版 p. 906、第 2 版 p. 912、《应用汉语词典》2000版 p. 867、《现代汉语学习词典》2010版 p. 864)。これが本来の形ですが、辞典使用者は出会った漢字はどちらなのかということが判断できない場合が多いかもしれません。そこで『中日大辞典』は一つの親字を二つの部分に分ける形にしました。丁寧に記述説明を付けたばかりではなく、たくさんの例（中にことわざや慣用句も含む）も付けてあります。日本の方に対してはもちろん、中国人の辞典使用者にとっても非常に勉強になるに違いありません。

例 2 ：“下”の下の小見出し“下班”（p. 1810）

“下班”という小親字見出しへの語釈は、『中日大辞典』では次のようです。

下班　xiàbān〈中国語の読み方でピンイン〉 ①［-儿］〈この意味では「er」化する必要があるという意味〉仕事が終わる。ひける。退勤（する)。〈語義説明、例略〉↔〔上 shàng 班〕 ②次の組。〈例略〉 (〈 〉内引用者)

ほかの辞書は、中国版でも日本版でも、中日辞典でも中国の漢語辞典でも、この語の語釈については、この①「仕事が終わる。ひける。退勤（する)」しか載せていませんが、『中日大辞典』だけ②の語釈を付け加えました。②の意味は確かにありますが、①と異なっています。①は仕事が終わって仕事場を出るという意味で、“下”と“班”は動詞と目的語の関係からできた熟

語で動詞です。一方、②の“下”は順序を表わす「次」の意味で、“下”と“班”の間には本来“一”があって、口語では省略されることがあります。“下一个”“下一周”“下一场”“下一届”などと同じ構造です。ここの“班”は「交替で仕事する場合の組」との意で、名詞ですから、“下”と“班”との関係は修飾・限定するものと修飾・限定されるものとの関係で、“下班”はやはり名詞で、①とは無関係です。ネイティブの中国人なら“下班”を聞いたり見たりしたら動詞の“下班”か名詞の“下班”か考えないですぐに分かりますが、日本の方はそうではないかもしれません。ということから、『中日大辞典』ではこのように扱ったのでしょう。正に日本の方のための辞書なのです。

例 3 ：親字“起”の下の小見出し“起承转合”（p. 1346）

これは昔から詩歌や文章を書くときの作法上の用語で、詩歌や文章の構造について言っています。『中日大辞典』は詳しくその概略を説明したばかりでなく、日本漢詩での用語「起承転結」と絶妙に訳しました。ここまで説明しましたら、日本の方だけでなく、中国人の辞書使用者にとっても非常に参考になると思います。

例 4 ：親字“四”の下の小見出し（p. 1613–1616）

親字“四”の下の小見出しは計173項目あります。なかには中国語の成語、慣用句、ことわざのほかに、中国の社会文化、風俗習慣、ないし歴史的事件、政治生活についての項目もたくさん含んでいます。“四大”“四大家族”“四类分子”“四清”“四人帮”“四五运动”“四项基本原则”“四一二政变”“四野”“四总部”などが出てきます。中国語だけではなくて、中国の近代史、政治史、社会文化などの勉強や研究をする方には非常に参考になると思います。

以上、まったく個人的な見解ですので、間違ったところも多いと思います。皆さんのご指摘をお待ちしております。

本日は、ご清聴くださいましてありがとうございました。